

保育者の子ども理解に及ぼす要因の検討

——「ちょっと気になる子ども」へのかかわり方から——

七木田敦・水内豊和・増田貴人¹

(2000年9月30日受理)

The factors analysis of preschool teachers' recognition on children
— the caring activities on “difficult child” —

Atsushi Nanakida, Toyokazu Mizuuchi and Takahito Masuda

The purpose of this study was to investigate the awareness on how to treat children according to preschool teacher's aptitudes. 107 teachers were categorized into the four types answering the questionnaires on their teaching methods and belief system. Each type of teachers were compared on age, the experience of child rearing, and caring activities on “difficult child”. The item mean scores and the factor analysis revealed that teaching methods varied according to the cases and teachers' caring experiences. The findings were discussed with reference to teachers' resources and belief.

Key words: “difficult child”, preschool teacher, teaching methods, caring experiences

キーワード: 「ちょっと気になる子ども」、保育者、指導方法、保育経験

I. はじめに

近年、保育園や幼稚園において、大人が意図的にかかわろうとするときに、「ちょっと気になる子ども」と表現されるような子どもが増えてきていると言われている。浜谷(1999)は、このことばの曖昧さに疑問を呈しながら、このようなことばを使わなくてはならない保育の現場では、すでに抜き差しならない事態であると述べている。そしてその原因について、次の三点から言及している。

まず第一に、統合保育の拡充があげられる。いわゆる障害児については、認知や言語の発達に関する研究が進むなかで保育者の手だてが明らかになってきており、また多様な機関との連携がはかられるようになってきたため、保育上さまざまな実績が蓄積されている。しかし、発達になんらかの問題を感じさせる子どもに関しては、そのような実績が活かされるわけではなく、保育者の悩みが深刻化、長期化すると述べている。

第二に、子育てを支える家庭の変容があげられる。急速に変わりつつある社会のなかで、少子化や核家族化という、これまでに類をみない子どもを取り巻く環

境の変化は、子どもの発達にさまざまな影響を与えているというもので、昨今のメディアからもこれを後押しする言説がなされている。近年の保育の場における「ちょっと気になる子ども」に関する研究では、上記の二点からの言及が比較的多い(金子、1987;伊川、1997;辻、1998;池添、1998;金田ら、2000)。

最後に、子どもと保育者との関係論的な視点からの原因究明がある。「ちょっと気になる子ども」には、気にする主体、つまり保育者の子どもの見方をも視野に入れながら、その変容についても議論すべきではないかというものである。従来、子どもの問題行動は、子ども自身か、あるいは親の養育態度にその原因を求めることが多かった。しかし鯨岡(1999)は、子どもの発達における「子ども—養育者」関係においては、養育者(保育者)の間主観的な把握の有り様が重要であると述べている。障害児教育においても、高階ら(1995)は、教師は個々の子どもの障害に注目しがちなため、障害に対する固定的な視点や枠組みが形成されやすいことを明らかにしている。ところが、これまで障害幼児のいる保育現場の保育者については、保育者自身の資質や保育観という観点から言及されたことはなかった。また、具体的にどのようにかかわるのかということに関連づけて言及された研究は少ない。杉

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

村・桐山(1991)は、保育学生および保育者を対象にした質問紙調査によって、「どこの園でもみられる、やや問題のある子ども」に対する Personal ATI (aptitude treatment interaction: 適性処遇交互作用)の形成には保育経験の長短が影響していることを述べている。そこで本研究では、保育者の保育観について障害児保育にかかわる意識から類型化を試み、いわゆる「ちょっと気になる子ども」への具体的なかかわり方の特徴について比較検討することを目的とする。障害児保育や「ちょっと気になる子ども」の保育では、「気になる子ども」を保育に適応させるという一方的な視点ではなく、子どものニーズに即し、保育者を含めた保育環境を調整できる柔軟性を持つということが欠かせない。またこのことは、通常の保育において自明の前提とされてきた通常の保育での子ども理解を相対化する可能性を有するものであろう。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象

広島県内の幼稚園3カ所、保育所4カ所の保育者を対象に調査を実施した。

2. 調査内容

保育者の資質や保育観が、「ちょっと気になる子ども」へのかかわり方へ及ぼす要因を明らかにするために、質問紙法により調査を行った。使用した質問紙の内容は、対象とした保育者の全体的な傾向をみるフェース・シート、「ちょっと気になる子ども」についての保育者の認識、保育者の資質や保育観、「ちょっと気になる子ども」に対する保育者のかかわり方、の計4部分からなる。

(1)フェース・シート: 保育者の年齢、保育経験年数、保育者自身の育児経験の有無、保育者の研修頻度、障害児保育経験の有無について。

(2)「ちょっと気になる子ども」についての保育者の認識: 「ちょっと気になる子ども」が増加しているかどうか、「思う」「思わない」で尋ねた。さらに、増加していると回答した場合は、増加の原因として掲げた選択肢16項目から、問題の解決方法として掲げた選択肢8項目から、それぞれ複数回答にて選択を求めた(項目は表2および3参照)。

(3)保育者の資質や保育観: 質問項目は、保育者の資質や保育観が保育指導にどう影響するかを質問紙により調査した高階(1995)のものを参考に、加筆修正した14項目を作成した。保育者はそれぞれの質問項目について、「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」「そう思う」「とてもそう思う」の4件法で評定す

表1 「ちょっと気になる子ども」についての事例の記述

S君は5歳です。特定の絵本が好きで、登園するとすぐに絵本を本棚から引き出し、パラパラとめくっています。他の活動に保育者が誘うと、床に寝ころんだり、泣いたりすることもあります。自分の遊びに夢中なときには、「おあつまり」が始まっても、やめようとしません。また、ときどき自分のクラスから飛び出すこともあります。友達同士の遊びには無関心な様子で、自分の遊びに友達が入ろうとすると泣き叫んでしまうこともあります。日常繰り返し返されることばの理解はできますが、まだ話しことばは十分ではありません。

るように求められた(項目は表4参照)。

(4)保育者の「ちょっと気になる子ども」へのかかわり方: 保育者が「ちょっと気になる子ども」にどのように対応しているかを明らかにするため、子どもの特徴の具体例を記述し、その子どもに対する指導の仕方について尋ねた。事例の記述は表1に示した。

質問項目は、「ちょっと気になる子ども」に対して考えられる対応を想定し、34項目を作成した(項目は資料に付す)。保育者は34項目の質問項目それぞれについて、「しない」「多分しない」「多分する」「する」の4件法で評定するように求められた。

3. 手続き

調査は、各幼稚園、保育所の園長に依頼し了承を得た後、保育者に質問紙が配布された。総配布数は150、回収数は107(回収率71.3%)であった。保育者の「ちょっと気になる子ども」へのかかわり方および保育者の資質や保育観を尋ねた質問項目については、回答を1点(「しない」および「まったくそう思わない」)～4点(「する」および「とてもそう思う」)に得点化した。一部回答漏れの項目があるため、質問によっては回答者数が異なるものがある。

Ⅲ. 結果と考察

1. 全体の傾向

(1)フェース・シートの分析

①保育者の年齢および経験: 保育者の年齢層について尋ねたところ、20歳代の人数が57名(53.3%)となっており、おおよそ半数を占めていた(図1)。それに対し、年齢層が上昇するにしたがって人数も減少しており、特に55歳以上の保育者はいなかった。なお、保育経験年数は、平均7年3ヶ月であった。

②保育者の育児経験の有無: 保育者に育児の経験を尋ねたところ、育児の経験がない者は66名(63.6%)であった(図2)。これは、前述したように、20歳代の若い

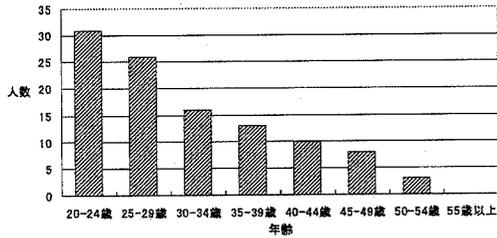


図1 保育者全体の年齢

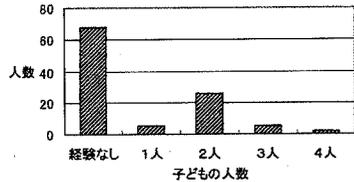


図2 育児経験者の有無

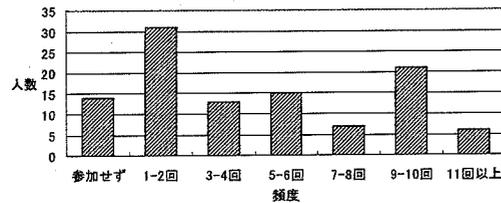


図3 保育研修の頻度

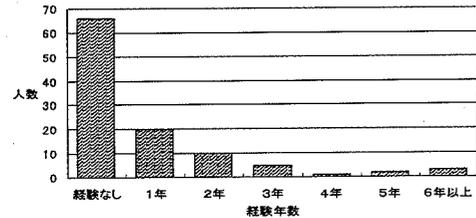


図4 障害児保育経験の有無

保育者が多いことを反映しているためと考えられる。

③保育研修の頻度：保育に関する研修に参加したことがあるかどうかを尋ねたところ、参加したことがあった保育者は94名（85.9%）であった（図3）。その頻度をみると、年に1~2回程度参加しているという保育者が31名と、全体の29%を占めている。一方、10回程度と回答する者も21名（19.6%）であった。このことから、ほとんどの保育者は、保育に関する研修に参加することにより、自らの専門性を高める努力をしていることがうかがえた。

④障害児保育経験の有無：障害児保育を経験したことがある者は、41名（38.3%）であった（図4）。しかし、その内訳をみると、28名（68.4%）の保育者が1年または2年と経験は短かった（平均年数=2.22；SD = 1.82）。したがって、保育者の多くは障害児保育の経

表2 保育者の考える増加の原因

項目	人数 (%)
親の養育態度	7 2 (19.2)
生活リズムの変調	4 2 (11.2)
核家族化	4 0 (10.7)
新聞・TV等のメディアの影響	3 9 (10.4)
生活上のゆとりのなさ	3 6 (9.6)
食生活	3 2 (8.5)
社会の変化	2 9 (7.7)
その他	8 5 (22.7)

表3 保育者の考える解決策

項目	人数 (%)
親との話し合いを増やす	8 2 (28.1)
保育者間の連携を密にする	7 4 (25.3)
子どもの事例に即して園全体で話し合う	5 7 (19.5)
他の施設との連携を密にする	3 2 (11.0)
各種研修会・勉強会の開催	1 6 (5.5)
その他	3 1 (10.6)

験がほとんどなく、またあったとしても経験した期間は短いといえよう。これは、回答した保育者は若年層が多いため保育経験年数も少なく、その結果として障害児保育の経験も少なくなっているものと考えられる。

(2)「ちょっと気になる子ども」についての保育者の認識

幼稚園・保育所に「ちょっと気になる子ども」が増加しているか、という質問に対しては、101名（94%）が「増加している」と回答していた。つまり、日常の保育のなかで、「ちょっと気になる子ども」が増加していると感じている保育者が非常に多いことを示唆している。

そこでさらに、この原因として当てはまると思うものを複数回答にて選択してもらった（表2）。これを見ると、「親の養育態度」「食生活」などの家庭に原因を求めようとしたり、あるいは「核家族化」「社会の変化」のように社会全体に問題を帰属させようとする保育者が目立っている。それに対し、「保育者の力量不足」のような保育者自身の能力や資質に帰属する要因をあげた者はみられなかった。「ちょっと気になる子ども」は、場所や雰囲気などの環境の問題だけでなく、指導者のかかわり方によっても子どもの気になる行動が生じたり消失したりするといわれる（辻、1998）。しかし、本調査からは、保育者は環境の問題によく気づいていても、自身のかかわりについてはそれほど問題視していないことが推測された。

同様にその解決策を複数回答で選択してもらった結果が表3である。「ちょっと気になる子ども」に伴う

表4 保育者の保育観についての因子分析結果

(有効サンプル=107)		抽出因子			
質問項目	I	II	III	IV	
I 経験重視型 ($\alpha=.74$)					
4 保育経験	.82	.03	-.14	.14	
13 育児経験	.72	-.13	.20	.09	
10 障害児保育の知識や経験	.62	.14	.16	.37	
8 障害児・者とのふれあい経験	.54	.38	.00	.05	
14 保護者との相談やカウンセリングの技能	.52	.22	.40	.19	
II 意欲・思いやり重視型 ($\alpha=.48$)					
7 健康体力	-.12	.66	.13	.01	
6 努力、研究心や意欲	-.01	.58	.05	.53	
5 明るさ、優しさ、思いやり	.13	.58	-.37	.04	
11 思考能力	.23	.45	.17	.13	
III 保育的価値観重視型 ($\alpha=.46$)					
1 教育に関する信念や保育観	.04	.06	.78	.24	
12 障害児に対する共感的理解	.38	.52	.52	-.14	
IV 知識・技能重視型 ($\alpha=.66$)					
2 保育についての専門知識	.11	-.05	.23	.79	
3 保育技術や技能、特技	.50	.09	-.10	.65	
9 協調性、指導性などの社会的技能	.27	.40	.13	.52	
寄与率(%)	29.93	10.64	8.44	7.69	
累積寄与率(%)	29.93	40.57	49.00	56.70	

種々の問題の解決策として、家庭や地域社会におけるリソースとの連携をあげる保育者が多くみられた。このことから、保育者は、自らの保育上の悩みとなるこれらの問題を、保育所の中でひとりで抱え込み解決しようとはせず、問題を共有して対応したいと考えていることがうかがえる。

2. 保育者の資質や保育観と「ちょっと気になる子ども」への対応との関係

(1) 保育者の資質や保育観についての因子構造

質問2について欠損値のない107名の回答を対象に、保育者の資質や保育観に関して主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。項目の採用は、回転後の因子負荷量絶対値が.40以上のものとし、最終的に解釈可能な4因子を抽出した。各項目の因子負荷量と各因子の寄与率、およびCronbachの α 係数をまとめたものが表4である。各因子の α 係数は.46～.74の範囲にあり、ある程度の内的整合性を示している。

第1因子は、項目4「保育経験」、8「障害児・者とのふれあい経験」、10「障害児保育の知識や経験」、13「育児経験」、14「保護者との相談やカウンセリングの技能」から構成される。これらの項目群は、14を除き、どの項目も経験を重要視していることを表す因子であると解釈し、「経験重視型」と命名した。

第2因子は、項目5「明るさ、優しさ、思いやり」、6「努力、研究心や意欲」、7「健康・体力」、11「思考能力」から構成される。これらの項目群は、保育者個人個人の生来的な能力・特徴や資質にかかわるものを重要視していることを表す因子であると解釈し、「意欲・思いやり重視型」と命名した。

第3因子は、項目1「教育に関する信念や資質や保育観」および12「障害児に対する共感的理解」から構

成される。それぞれが特徴的な項目である。これはその上位概念として保育に対する価値観と解釈することで因子特徴を代表できると考え、「保育的価値観重視型」と命名した。

第4因子は、項目2「保育についての専門知識」のいわゆる保育知識と、項目3「保育技術や技能、特技」および9「協調性、指導性などの社会的技能」のいわゆる保育技能から構成されている。したがってこれらの項目群は保育に携わる上で必要とされる知識および技能を重要視していることを表す因子であると解釈し、「知識・技能重視型」と命名した。

高階(1995)は、同質問項目を用いて、障害児教育に携わる教師の教育観について、因子分析をもとに検討している。それによると、「資質重視型」、「経験重視型」、「専門重視型」の3タイプの教師群を設定している。その詳細をみると、項目12の「障害児に対する共感的理解」が因子を構成する項目として採用されており、今回の研究では、「保育的価値観重視型」という因子を代表する項目として採用している。このことから、適切な配慮のもと集団の中で発達する可能性を十分秘めた統合保育では、保育者は小学校教師に比べ、障害児や「ちょっと気になる子ども」への共感的理解を尊重した保育的な価値を重視しやすい傾向にあるものと考えられる。

(2) 保育者群の特徴の検討

① 保育者の年齢および経験

保育者の年齢層について、各群別に示したものが図5である。「経験重視型」および「知識・技能重視型」の保育者は、相対的に若年層が多いことが特徴としてあげられる。それに対して、中高年齢の保育者は「保育的価値観重視型」に多いことがみうけられる。あわ

せて、各保育者群の保育経験年数の平均をみると(表5)、「保育的価値観重視型」の保育者には上述の結果と同様、保育経験歴の豊富な人が多いことがわかる。これらのことから、保育経験の少ない保育者および若い保育者は、保育経験の多い保育者の日常の保育場面を目の当たりにして、経験や知識・技能の差を感じており、経験に裏打ちされた保育への憧れや、知識・技能の習得を自分の保育へ取り入れたいと考えていることが予想される。あるいは、保育者養成機関にて、経験や知識・技能が保育者にとって重要な要素であるということを意識づけられているとも考えられる。

②保育者の育児経験の有無

育児経験の有無は、図6で示すように、どの保育者群においても、育児経験のない者が経験のある者よりも多い。しかし、そのなかでも、「保育的価値観重視型」を示す保育者は、育児経験のある者が他に比べて多いことがみうけられる。このことは、先述の「保育的価値観重視型」の保育者が保育経験が多く、また、年齢も高いことと関係して、保育観の形成には、育児経験がやや影響している傾向が予想された。

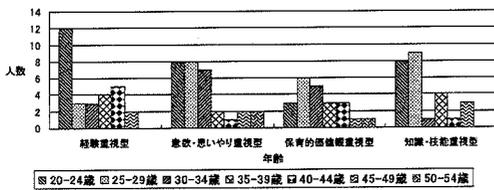


図5 保育者群の年齢構成

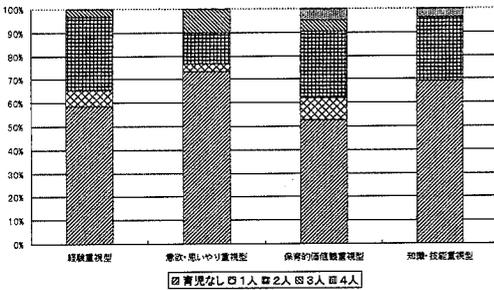


図6 保育者群の育児経験の有無

表5 保育者群の保育経験の平均年齢

各因子	平均値(月数)	SD
「経験重視型」	78.07	69.91
「意欲・思いやり重視型」	90.13	59.06
「保育的価値観」	110.77	70.62
「知識・技能重視型」	76.86	57.77

③保育研修の頻度

保育研修の頻度についてみると、保育に関する研修を受けたことがない、あるいは研修の回数が比較的少ないとする保育者が、「経験重視型」に多いことがみうけられる(図7)。このことから、「経験重視型」の保育者は若年層も多いことから、保育者養成機関を終えて間もない保育者が多く、新しい知見を得ることよりも実践経験を積むことを望んでいるのではないかと考えられる。一方、「意欲・思いやり重視型」を示す保育者は比較的研修回数が多い。これはさまざまな研修に参加することで、意欲や思いやりを尊重した保育へ活かしたいという思いの露呈であると考えられることもできよう。

④障害児保育経験の有無

各因子の障害児保育経験の有無についてみると(図8)、「意欲・思いやり重視型」の保育者は、他の保育者群よりも比較的障害児保育を経験している者が多いことがわかる。その一方、「経験重視型」の保育者は、障害児保育の経験が少ない。このことから、特に個々のニーズに沿った保育がより一層必要とされる障害児の保育には、意欲や思いやりが重要であるとの認識を持つことが予想される。

⑤「ちょっと気になる子ども」に対する保育者群の検討

「ちょっと気になる子ども」に関して、「意欲・思いやり重視型」「保育的価値観重視型」では全ての保育者が、また「経験重視型」の保育者でも82.8%もの保育者が増加していると回答した。

「ちょっと気になる子ども」の増加の原因について、「親の養育態度」「食生活」「メディアの影響」「生活上の

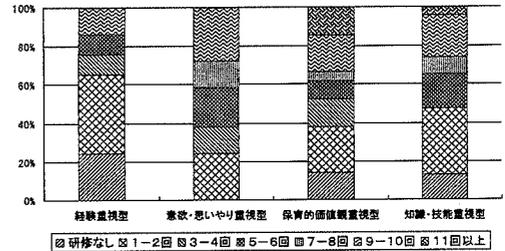


図7 保育者群の保育研修の頻度

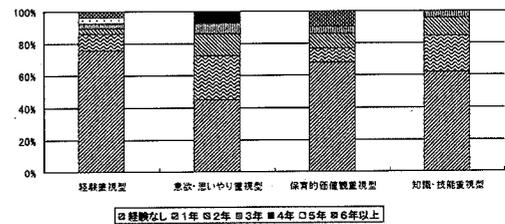


図8 保育者群の障害児保育経験

ゆとりのなさ」の項目が共通して多かった。これらは育児上の問題として近年話題となっているもので、特に「ちょっと気になる子ども」の原因として特定化することは難しい。個々の保育者群でみると、「経験重視型」では「社会の変化」が多く、「核家族化」は「意欲・思いやり重視型」「知識・技能重視型」、「生活リズムの変調」は「保育的価値観重視型」「知識・技能重視型」の保育者で目立っていた。しかしながら各保育者群を特徴づけるような説明要因は見つけることはできなかった。

その解決策は、「保育者間の連携」、「子どもの事例を園全体で話し合う」、「他の施設との連携」、「親との話し合いを増やす」が多く、また、連携を重視する傾向が高い傾向を示した。しかし、どの保育者群においても大きな違いは認められなかった。

(3) 保育者群別にみる「ちょっと気になる子ども」への対応

上述の因子分析による因子得点から、被験者となった保育者107名を因子ごとにグルーピングした。それぞれの保育者群について、「ちょっと気になる子ども」への対応を尋ねた34項目の質問項目への回答のなかから、特徴的なものについて抽出し、以下に考察する。

①「励ましたり誉めたり、得意な面を認める」：この項目に関しては、「意欲・思いやり重視型」の保育者が、肯定的である割合が高かった(90%)。それに比べ、「保育的価値観重視型」の保育者には、「多分しない」と回答するものの割合が比較的多く(14.3%)、両者に違いが認められた。後者の保育者の場合、障害児に対する共感的理解は高いものの、こと指導においては欠点を解消することに重点を置く傾向があることが示唆された。

②「間違いはやりなおしをさせ、しからない」：「経験重視型」の保育者では、「多分する」(70%)、「する」(30%)に回答が集中しており、特定の回答傾向がみられない他の型とは、際だった違いが認められた。これは、本研究で対象とした「経験重視型」の保育者が、比較的年齢も若く、経験年数も少ないことから、例示したケースに対して、大学や短大で学んだ知識や、個人的に得たセオリーによってステレオタイプな回答をしているものと考えられる。一方で、前述の「保育的価値観重視型」の保育者のなかにはこの問いに否定的な回答をするものが34%もいた。

③「身体イメージや空間をとらえる学習をする」：「知識・技能重視型」の保育者はこの項目に肯定的な回答をするものが比較的多かった(76%)のに対して、「保育的価値観重視型」の保育者では「多分しない」と回

答した者が62%を占めていた。障害児教育の場面では、運動困難やコミュニケーション障害の軽減のために、達成すべき教育課題として本項目のような対応が実践上取り上げられることが多い。このことから、「知識・技能重視型」の保育者は、一般的な障害児指導の知識として理解しているものと考えられる。

④「できないことや手伝ってもらいたいことを本児と話し合う」：本項目においても「保育的価値観重視型」は他の因子型と比較して、顕著な特徴を示していた。「知識・技能重視型」(35%)、「経験重視型」(30%)の保育者では、事例で示したような子どもと話し合うという割合が高いのに対し、「保育的価値観重視型」の保育者では、わずかに9%が「する」と答えたのにとどまった。これは事例のような子どものニーズをクラス集団のなかでとらえ、取り組もうとすることによって考えられた。

⑤「～したら～してもいいよ」と話す：この項目については、「意欲・思いやり重視型」の保育者で否定的な回答をしたものが高かった(60%)のに比較して、「知識・技能重視型」、「経験重視型」がそれぞれ68%、52%と高い割合で肯定的な回答をした。「意欲・思いやり重視型」の保育者は、子どもの行動について受容・容認するタイプであり、本項目のような子どもができることを条件づけて制限させるような指導について認められない傾向にあるといえる。一方で他の保育者群では、このような制限つきの対応は、問題行動に対しては有効であるとする自らの teaching theory となっているものと考えられる。

⑥「～がしたい」「～がほしい」の動作を教える：この項目に関しては、「意欲・思いやり重視型」と「保育的価値観重視型」との違いが明確になった。前者では、27%の保育者が否定的な回答をしたのに比べ、後者では81%もの保育者が「多分する」、「する」と回答していた。後者においては、保育者の側から子どもへかかわるという積極的、意図的タイプであることが浮き彫りにされた。

⑦「個別の課題や集団学習を取り入れる」：「保育的価値観重視型」の保育者では、この項目を「する」と回答していた者は0%で、他の保育者群にはみられない傾向を示した。これは前述⑥で「保育的価値観重視型」が意図的な介入に肯定的とする回答と一見矛盾しているものと考えられる。「保育的価値観重視型」の保育者は、個々の子どもの生活スキルの獲得のために最低限必要なことは身につけさせようとするが、それが保育の課題になったり学習になることには否定的なのかもしれない。前述の④、⑥での特徴も加味すると、「保育的価値観重視型」の保育者は、事例のような

「ちょっと気になる子ども」には、個別の配慮の必要性は認めているものの、クラス集団の維持や運営をより重視する傾向が強く、一方、これと対照的に「意欲・思いやり重視型」は個々の子どもに配慮するような集団づくりをするタイプではないかと考えられる。

⑧「ハンディを克服する意志を育てる」：「経験重視型」の保育者の中に「する」、「多分する」と回答していた保育者が比較的多かった（67%）。一方、「意欲・思いやり重視型」では、30%程度の保育者は「する」とは回答していたものの、それ以外は否定的であった。ハンディを克服するためには意志も必要だが、子どもの課題をハンディとしているさまざまな要因についても検討する必要がある、したがってこの項目に否定的だった保育者にはこうした理解が共通にあるものと考えられた。

Ⅳ. まとめ

本研究は、保育者の資質や保育観が、「ちょっと気になる子ども」へのかかわり方へ及ぼす要因を明らかにするために、保育者に対し、質問紙法によるアンケート調査を実施した。その結果、次に述べる点が明らかになった。

まず第一に、非常に多くの保育者が、日常の保育のなかで、「ちょっと気になる子ども」が増加していると感じていることがあげられた。そして、その原因として保育者は社会や環境の問題と捉えており、その解決には、各種機関との連携によるチームアプローチが必要であると考えていることが示唆された。

第二に、保育者はその資質や保育観により、「経験重視型」、「意欲・思いやり重視型」、「保育的価値観重視型」、そして「知識・技能重視型」の4タイプに類別され、年齢や保育経験さらには研修の頻度や障害児経験の有無が保育観の相違の形成に影響を与えていることが示唆された。特に、障害児保育経験を有する者に「意欲・思いやり重視型」が多く、その理由として、個々の子どもの保育ニーズへの配慮が重要な障害児保育を通して、意欲や思いやりが重要との認識をするようになるためと考えられる。

第三に、各保育者群により、「ちょっと気になる子ども」へのかかわり方に特徴的な相違がみられた。特に、「意欲・思いやり重視型」の保育者は、子どもの行動を受容・容認する傾向を示していた。それに対し、「保育的価値観重視型」の保育者は、保育者の側から個々の子どもに積極的・意図的にかかわるという傾向を示していることが示唆された。

最後に、各保育者群の特徴を検討することで、特に

年齢及び保育経験が保育観の形成に大きな影響を及ぼしていることが示唆された。つまり保育者は、経験を積むことで、経験や知識・技能を重視した保育観から、意欲・思いやりを重視し、やがて保育的な価値観を尊重してゆくといった、保育観の変容といった可能性が仮説として提示された。

今後は、今回の調査の結果をふまえ、「ちょっと気になる子ども」を捉える観点を明確にした上で、保育者の資質や保育観が、子どもへの対応にどう影響するかを検討していきたい。

資料1（質問項目）

1. 行動の意味を観察しながら指導の糸口を見いだす
2. 励ましたり誉めたりして、よい面や得意な面を認める
3. 自発的なサインや様子を見逃さないようにする
4. なるべく一人でできることを増やす
5. 好きなこと興味のあることを十分に時間をとる
6. 間違いはやり直しをさせ、しからないでやさしく接する
7. 一対一の遊びの中で、良いこと悪いことを教える
8. 様子を見ながら言葉かけをし自分で確認しながら行動できるようにする
9. クラスの仲間という考え方で接する
10. 自分から取り組むことのできるような手がかりを工夫する
11. 動揺せず穏やかな態度で接する
12. からかったり、仲間はずれは絶対に許さない姿勢で接する
13. ゆったりした集団行動の場面を設定する
14. 家庭との連携を密にする
15. 遊ぶ集団の中に担任と一緒に参加する
16. いけないことをした時は厳しくしかる
17. 身体イメージや空間を捉える学習を設定する
18. 子どもができそうな係や役割を設定する
19. みんなでできることを増やす
20. 失敗した時にはさりげない援助をする
21. できないことや手伝ってもらいたいことなどを本児と話し合う
22. 手をとって同じ活動をするように促す
23. 集団参加の場面では友達が手伝うように働きかける
24. 「～できたら～してもいいよ」と話す
25. 一緒にできることできないことの内容を他児に知らせておく

26. 失敗を見つけるのではなく、子どものよい態度をほめる
27. 無理して参加させることはしない
28. いろいろな面から友達を捉えられるように本児に働きかける
29. 担当者がそばにつき見守る
30. 「～がしたい」「～がほしい」の言葉や動作を教える
31. 困っている時には担当が手伝う
32. 個別の課題や集団学習をとり入れる
33. ハンディを克服する意志を育てる
34. 話しかけに応じて行動することをいろいろな場面で経験できるよう設定する

殊教育学会第38回大会発表論文集, 387.
金子保 (1987): 気になる子どもの行動となおし方. 田研出版.
鯨岡峻(1999): 関係発達論の構築—間主観的アプローチによる—. ミネルヴァ書房.
杉村健一郎・桐山雅子 (1991): 子どもの特性に応じた保育指導— Personal ATI Theory の実証的研究—. 教育心理学研究, 39, 31—39.
高階恵子・白鳥忠・稲垣和雄・藤井茂樹・七木田教・今塩屋隼男 (1995): 教師の Belief Pattern と障害児理解に関する研究. 日本特殊教育学会第33回大会発表論文集, 992—993.
辻誠一 (1998): 気になる子どもとのつきあい方. 明治図書出版.

引用文献

伊川義安 (1997): 気になる子どもへの対応. 黎明書房.
池添素 (1998): ちょっと気になる子どもと子育て—子どものサインに気づいて—. かもがわ出版.
金田利子・今泉依子・青木瞳 (2000): 集団保育において「気になる」といわれている子の実態と対応. 日本特

謝 辞

お忙しい最中にもかかわらず、本研究の意図を汲み、アンケートに協力していただきました広島県の各幼稚園・保育所の先生方に深謝申し上げます。